広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	現代日本語の「かのように」について
Author(s)	深見，兼孝
Citation	広島大学森戸国際高等教育学院紀要 , 6 : 1 - 7
Issue Date	2024-03-31
DOI	
Self DOI	10.15027/55624
URL	https://doi.org/10.15027/55624
Right	
Relation	

現代日本語の「かのように」について

深見兼孝

On the Modern Japanese 'kanoyooni'

Kanetaka Hukami

Modern Japanese has also 'kanoyooni' as a simile marker along with 'noyooni'. But the former is less investigated than the latter. This paper tries to show what 'kanoyooni' means and how it is used by analyzing the examples form 11 modern Japanese novels. The main findings are: 1) 'ka' of 'kanoyooni' reflects the speaker's uncertainty or hesitation to assert the content of the event expressed by the 'kanoyooni' clause is suitable as an explanation of the event expressed by the main clause, 2) the tie of the two events is more subjective, and therefore 3) this latter gives expressively or stylistically a heavy or formal impression.

Keywords: *simile, factuality, the speaker's uncertainty*

キーワード：直喩、事実性、話し手の確信のなさ

1. はじめに

比喩を直喩と隠喩に大別した場合、現代日本語における直喩表現の代表的な標識は助動詞「ようだ」であろう。助動詞「ようだ」は、動詞・形容詞の連体形に付き、名詞には助詞「の」が介在する。これが助動詞「ようだ」の基本的な文法的特徴だが、それ以外に疑問・不定の助詞「か」が導く節に接続する場合もあって、この場合も助詞「の」が介在する。しかし、この後者の場合は前者ほど取り上げられることはないように思える。本稿は「ようだ」の連用形「ように」がこの疑問節＋「の」に続く構文（以下、「かのように文」と呼ぶ）が、どのようなことを表すのかについて考える。

2. 問題点

森田(1980:503-506)は「ようだ」の用法を次のようにしている。そこで挙げられている一例とともに示す(1)：

① Bの説明としてAを引き合いに出す場合

(1) 比況の言い方：AとBは概念上異なる

・ 気が狂ったように泣き叫ぶ

(2) 例示の言い方：AはBに含まれる下位概念

・ 日本のように四季の変化のある国では～

② Bの具体例として、その内容Aを示す場合

(3) 内容説明として示すA：AとBは一致

・ 右に説明したように、本年度予算は極めて厳しい状態ですから……

(4)　帰結として予想されるA状態

・ 車に酔わないように、酔止めの薬を持って行きなさい

③　BがA状態であることを感知する言い方

(5)　不確かな断定

・ どうやら風邪をひいたようだ

(6)　婉曲

・ 先生、雨が降ってきたようです

また、(1)については「慣用化されたものが多い(p.503)」と言っている。

上の説明でAは「(の) ようだ」に先行する部分（が表す事柄）を指している。(1)はAの表す事柄が事実であってもそうでなくてもよい[(2)]が、(2)〜(4)はAが表す事柄は事実または事実であることを期待されていなくてはならないだろう。しかし、森田(1980)には「かのように」への言及はない[(3)]。「かのように文」のAは「実際はそうではないがそのように見える」[(4)]とされるので、(3)〜(4)に当たるものはないと思われる。また、(2)も名詞に直接続く用法であるので、「かのように」には当たらない。一方、(1), (5), (6)に対応する用法は存在するだろう。確認しておく必要がある。ただ、(6)は終止形「ようだ」の形を取っているときのことを言っているが、「かのようだ」という終止形の例は今回見当たらなかったので、(6)については言及しないことにする。

(1), (5)に対応する場合、「かのように」が導く節が非事実と解釈される内容を表す場合がどのくらいあるか見ておきたい。もし、Aに「実際はそうではないが」という意味が含まれるなら、非事実の割合は相当多いことになる。しかし、(1)すなわち「比況」の場合、Aは事態の記述としてではなく、Bの説明に持ち出されたものなので、そもそも、話し手にとっては仮想的である。事実かどうかは関心外だと想定できる。したがって、Aが非事実というのは、ある程度はあるだろうが、非常に多いとは言えないのではないだろうか。むしろ、Aに元々疑問の助詞である「か」が接続する形になっているのは、Aの事実性への確信のなさというより、Aの何か別のことへの確信が持たれていないことの反映であろう。

3. 方法

資料は現在からおよそ半世紀まで遡ることを目安に、手持ちの 1970 年代以降の小説 11 編から抽出した例文に基づく[(5)]。これらの小説は分量として均一ではないが、テーマや文体も同じではなく、同じ作家の作品はない。

まず、上で述べた確認事項を確認する。あわせて「比況」を表す「かのように文」の主語の現れ方を見る。注目するのは、Aの主語が特定されない場合があるかどうかである。一般的事象であれば、主語は特定されない（したがって、表示されない）で

あろう。これによって、A が個別的なことを表すのか一般的なことを表すのかが分かるだろう。個別的なことを表すのなら、慣用化は進んでいないと見ることができる。

次に、A と B の述語が、以下の「ように」の場合のように、意味を共有しているかどうかを見る。1)では、「ため息をつく」のはいろいろな場合があるだろうが、そのうちのひとつとして「ほっとする」がある。「ほっと」して息をもらせば「ため息をつく」ことになろう。また、2)で「つぶやく」と「語る」は言語を発するという点で共通している。

1) 一生懸命にそれだけ言うと、信子はほっとした**ように**ため息をついた。(『理由』)

2) 手元のカップを見つめて、雄一はつぶやく**ように**語った。(『キッチン』)

もし、AB の述語に意味的な共通性を見出しにくいとすれば、話し手はより慎重に A を提示していることになるだろう。それが、「かのように」の「か」に反映していると考えることができる。なお、これまで、言語形式とその内容を区別せずに A, B と使ってきたので、AB は言語形式に限定し、以下 A を「かのように節」、B を主節と呼ぶことにする。

4. 確認

4-1　非事実

「かのように文」の例は 106 あった。表 1 が示すように、それらは 3 例を除いて、森田(1980)の(1)か(5)に当たる（94 例と 9 例）が、ほとんどが(1)と同じ「比況」の用例であった。他の例は見当たらなかった。表 1 は「かのように」節の表す事柄が、それぞれの用法について、文脈または常識の上で非事実と判断される割合も示している。

表 1 「かのように」の用法（カッコ内は実数）

	用例	非事実の割合
比況	88.7 (94)	29.7 (28)
反事実的断定	8.5 (9)	55.6 (5)
(4)に対応	2.8 (3)	100.0 (3)
計	100.0 (106)	34.0 (36)

全体として 3 割強が非事実となっている。「比況」では 3 割弱である。「反事実的断定」の例の主節に用いられた動詞は以下の通りである（カッコは例数）: 受け取られる(1)、思える(1)、感じる(1)、見える(6)。このうち、「受け取られる」「思える」と「見える」のうちの 3 例、計 5 例が「非事実」と解される。これは森田(1980)の(5)に対応する。「非事実」と解される場合、「不確かな断定」とは呼べないので、とりあえず「反

事実的断定」と呼んでおく。(4)に対応するものとしては、主節の述語として「誤摩化す、細工する、ねつ造する」のように、「かのように」が導く節が非事実であることを示す動詞が用いられていた（１例ずつ)。この場合、AB の一致は表面的にしか過ぎず、その実は虚偽・偽装とでも言うべきである。

このように、「かのように文」の「かのように」が導く部分が非事実を表す場合は確かにあると言える。しかし、それが非常に多いとまでは言えないだろう。幾つかの例を挙げる。まず、非事実を表す例である。次の例で「ビルの群れ」が実際に「呼吸する」ことはあり得ない。典型的な「比況」の例である。

3) 海岸線に並んだ高いビルの群れが、まるで呼吸している**かのように**淡い光を発しているのだった。(『半島』)

次の例は「反事実的断定」の例である。ここの話し手は「あなた」が「砂川さんたち」を「殺して」いないことを知っている。

4) ― つまり、部屋を明け渡そうとしない砂川さんたちに腹を立てて、あなたが殺してしまった**かのように**見えると。(『理由』)

もう一例あげる。この例でも話し手は「なにも問題はない」のが事実ではないことを知っている。「思う」が「～てしまう」の形をとっていることからも分かる。

5) 鼻がつまってなにを飲んでるのか今ひとつわからない以外は、なにも問題はない**かのように**思えてしまうくらい、おだやかな気候だ。(『キッチン』)

次は A が「偽装」の内容の例である。「今入荷した」のは事実ではなく、そのように偽装するわけである。

6) そこで蔵の中から見合った在庫品を引っ張り出して来て、恰も今入荷した**かのように**誤魔化す訳だ。(『姑獲鳥』)

4-2　不特定主語

表 2 は「比況」の場合「かのように」節の主語が特定かどうかを示したものである。主語が特定されないと解釈できるのは 2 例に過ぎなかった。

表２　「かのように」節の主語（カッコは実数）

特定	97.9 (92)
不特定	2.1　(2)
計	100.0 (94)

以下はその２例である。すなわち、それぞれ、誰が「瘧に（でも）罹っ」ても、同じように「がたがたと震え」、（新聞記者なら）誰が「懐に拳銃を呑んでい」ても、同じ

ように「雄々しくなれる」と解釈できる。ただし、これらの例でも、主語は主節の主語と同一だという解釈が不可能ではないだろう。

7) まるで癇にでも罹った**かのように**がたがたと震え、堪え切れぬように目頭を押さえたかと思えば、その手を額に当てる。(『姑獲鳥』)

8) ひとたびいいネタを仕入れれば、まるで懐に拳銃でも呑んでいる**かのように**雄々しくなれる。(『半落ち』)

このように、「かのように」が導く節は、個別の事象を表す傾向がきわめて強いと言える[(6)]。

5. 「かのように節」と主節の表す事柄の意味

「比況」において、「かのように節」と主節の述語の意味に共通性があると考えられるのは、緩やかな解釈をしたとしても 16 例(17.0%)であった。これは決して大きい数字とは言えない。以下にいくつか例をあげる。9)では、主節の「大声で言う」も「かのように節」の「言い聞かせる」も言語を発するという点で共通している。10)では主節の「わがままや甘えの台詞を投げる（ようなこともある）」は「かのように節」の「赤ん坊に戻った」ら当然起こることだと考えられる。11)では主節にある「ぐちゃり（と）」が「かのように節」の「壊れてしまう」の様子として強く結びついている。12)では主節の笑い声の調子が「かのように節」が表す「馬鹿にする」調子であることは十分あり得る。

9) 私は中の涼子にいい聞かせる**かのように**、愈々大声でいった。(『姑獲鳥』)

10) 祐介の世話は敏子に任せ切りだったが、すっかり安心しているのか、赤ん坊の様子を気にしてあれこれ尋ねるということもなく、むしろ綾子自身が赤ん坊に戻ってしまった**かのように**、病床に付き添う看護婦や父に、頑是ないわがままや甘えの台詞を投げるようなこともあった。(『理由』)

11) 木場が恫喝すると内藤は壊れてしまった**かのように**ぐちゃりと椅子に身を沈めて温順しくなった。(『姑獲鳥』)

12) その声を馬鹿にする**かのように**、男の高い笑い声が、同じ赤い唇から洩れる。(『陰陽師』)

しかし、多くの例では「かのように節」と主節の述語に意味的な共通性を見出すことは難しい。用例の中には、「かのように節」の表す事柄が主節の表す事柄の目的、あるいは前者の結果として後者が起こるように見えるものとして設定されているものがある。例えば、13)では話し手は「かのように節」の事柄は主節の「あらんかぎりの悲鳴を上げる」でそのことを達成しようとしている（目的）ように見えるものとして設定しているが、「悲鳴を上げる」に直接関わる諸概念、すなわち、声（悲鳴）の長さや高さ、鋭さなどを含む調子とは関係がない。14)では話し手は「恐い体育教師によびつ

けられた結果「清一のほうへかけよった」ように見えると想定しているが、「かけよる」に直接関わるスピードや足の運びに関わる概念とは関係がないだろう。

13) 一瞬呼吸を忘れ、それから自分自身をその場から遠ざけるかのように、あらんかぎりの悲鳴を上げた。（『西の魔女』）

14) 少年たちは恐い体育教師に呼びつけられたかのように清一のほうへ駆け寄った。(『三匹』)

さらにいくつか例を挙げておこう。いずれも、主節の内容は「かのように節」の内容の結果か「かのように節」の内容が主節の内容の目的のように見えるとして想定されていると解釈できるが、だからと言って両者の間に上で述べたような意味の共通性を見出すのは難しいだろう。なお、17)では本来の「かのように節」が分離されて、本来の主節のあとに文として付加された形になっている。

15) するとその声が聞こえた**かのよう**に言い返す。(『博士』)

16) アキはぼくの口調に気後れした**かのように**口を噤んだ。(『世界の』)

17) ジョニー・ウォーカーはシルクハットに軽く手をやった。まだその帽子がちゃんと自分の頭の上にあることを確認する**かのように**。(『カフカ』)

以上のように、「かのように節」と主節の意味の共通性を見出すのは概して難しい。「かのように節」と主節の表す事柄の概念的類似性は一般的に薄いと言えるだろう。

6. 結論と今後の課題

以上見てきたように、話し手は一般的に主節事態時における感覚（主として視覚）に依存し、その説明に相応しい事態をその都度想定しようとするが、完全に相応しいと言っていか確信が持てない、あるいはためらいがあると考えられる。「かのように」の「か」にはこれが反映されていると見るべきであろう。したがって、「かのように」節と主節の結びつきは極めて主観的、個別的であり、そのことが、表現上のあるいは文体上の重みないしは硬さを生んでいるものと考えられる。なお、「かのように節」が非事実を表すということはある程度ありえるが、強調されすぎてはいけないだろう。

本稿では「かのように」節と主節の述語の意味的類似性というものを考えてみたが、これを十分に客観的に測る方法を見出してはいない。また、「ように」との比較も必要である。今後の課題としたい。

注

(1)「ように」が節を導いている例が挙がっていればそれを引いた。なお、「ようだ」についてはこれとは多少違う分類が永野(1969:315-317)においてなされている。

(2)　森田(1980:503-506)には言及がない。次の例（作例）では話し手は A は起こること、起こったことであると確信している。

・ 中緯度地域では太陽が東から出て西に沈むように、多くの星々もまた東から出て西に沈む。
・ 伝助は父親がそうであったように、やはり水呑百姓であった。

(3) 永野(1969:315-317)においても言及がない。

(4) 『日本語 NET』の中で「かのようだ」の意味として、「～ように見える/ように感じる　実際はそうではないが～のように見えたり感じたりすると言いたい時に使う」とある。『日本語の里』でも「実際は違うが X のように見える/感じられると言いたい時に使う。何かに例える言い方」とある。『日本語の里』では「～ようだ」より少し硬い言い方とされている。

(5) 実際に目を通したのは 15 編であった。したがって 4 編には「かのように」が現れていない。「かのように文」の出現に文体が影響していると思われる。

(6) 「かのように節」と主節の主語が同一かどうかについて言えば、同一主語の場合が多かった(77.6%, 73 例）た。個別の事象とは言っても、同じ人物や物の異なった事象であることが多いということになる。しかし、これが意味するところは、今のところ不明である。事実の指摘にとどめておきたい。

引用文献

森田良行(1980)『基礎日本語』角川小辞典 8. 角川書店
永野賢(1969)「ようだ—比況＜現代語＞」: 松村明編『古典語現代語助詞助動詞詳説』學灯社
日本語 NET: https://nihongokyoshi-net.com/2019/07/12/jlptn2-grammar-kanoyouda
日本語の里: https://nihongonosato.com/jlpt/n2-grammar/n2-kanoyouda

用例出典

『姑獲鳥』: 京極夏彦『姑獲鳥の夏』講談社文庫、講談社
『陰陽師』: 夢枕獏『陰陽師飛天ノ巻』文春文庫、文藝春秋
『カフカ』: 村上春樹『海辺のカフカ（上)』新潮文庫、新潮社
『キッチン』: 吉本ばなな『キッチン』角川文庫、角川書店
『三匹』: 有川弘『三匹のおっさん』新潮文庫、新潮社
『世界』: 片山恭一『世界の中心で愛を叫ぶ』小学館
『西の魔女』: 梨本香歩『西の魔女が死んだ』新潮文庫、新潮社
『博士』: 小川洋子『博士の愛した数式』新潮文庫、新潮社
『半落ち』: 横山秀夫『半落ち』講談社文庫、講談社
『半島』: 村上龍『半島を出よ（上)』幻冬舎文庫、幻冬舎飼育
『理由』: 宮部みゆき『理由』新潮文庫、新潮社